

幼稚園の理念の深化と実践の進化 —フレーベルの幼稚園創設175周年記念祭での二つの講演から—

小笠原 道雄*

A study on the incorporation of Fröbel's (Froebel) kindergarten and its evolution of practice.

Michio OGASAWARA

Today, Friedrich Fröbel (Fr. Fröbel, 1782-1852) is considered to be the father of "kindergarten" all over the world. This attribution comes from that Fröbel founded "Allgemeinen Deutschen Kindergarten - Stiftung," (German general kindergarten foundation) in the city hall of Bad Blankenburg on June 28, 1840.

Therefore, on June 28th of this year, the idea or concept of "kindergarten" will reach its 175th anniversary. A memorial festival was held in the grand hall of the same city hall where the foundation was established on June 28, 1840.

Commemorative lectures by Helmut, Heiland (Vice-President International Fröbel's Society), and a keynote lecture by Karl Neumann (President Pestalozzi - Fröbel's Union of Germany) were given on June 29.

This report covers the title, (A study on the incorporation of Froebel's kindergarten and its evolution of practice.) in the two lectures mentioned above.

キーワード：Fr. フレーベル Fr. Fröbel、幼稚園 Kindergarten、教育遊具 teaching tool.

はじめに

1840年春のある日、カイルハウからブランケンブルクへ友人とハイキングにでかけたフレーベルは、シュタイガーの丘の上にあった。眼下の展望はキンネン溪谷。なんと明るく温かな景観、壮大な美しい庭のようだ。突然、フレーベルは「そうだキンダーガルテン（子どもの庭）という名前にし

よう！」と山に向かって叫んだ。

狭い壁に仕切られた家ではなく、また単に、小さな子どもの世話のための施設でもなく、フレーベルが思い浮かべたのは、まさに夢のような理想郷であった。そこには純真な婦人の性向と子どもの生活との調和的な十全な統一がなされる「庭」であり、それが全ドイツにまで広がるという壮大な「一般ドイツキンダーガルテン」の構想であった。[図1 1840年頃の「子どもの庭」シュミーデクネヒトによるリトグラフ]

* 広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科
Hiroshima Bunka Gakuen University
Faculty of Arts and Sciences,
Department of Childhood Studies

フレーベルが考えていた幼稚園の機能、またそ

こでの教育実践はいかにあるべきかについては、多くの手紙や計画書やその他の資料が説明している。なかでも、「ドイツ幼稚園報告」には、三つの基礎的な課題があげられている。

その目的は、「まず、就学前年齢の子どもを単に保育するだけでなく、彼等の全体的本質に対応した活動を与えて、彼等の身体を鍛え、感覚を訓練し、目覚めた精神と関わらせ、感覚的に自然と人間世界に親しませること、とりわけ、心と心情を正しく導き、あらゆる生活の原初的な基盤との一致へと導くこと。一方、職員たち、つまり男女の若い保育者に子どもたちの正しい指導と活動を教えること。第三に、ドイツ幼稚園は、幼児保護を共有財産にすべく、そのための遊具の宣伝、普及に努めること。子どもの段階的な発達と人間の本質に基づいた適切な遊戯と遊戯様式をもとめること」であった。

幼稚園の課題に関するこのような考えは、フレーベルが何か斬新なものをすでにつくり出していたことを示している。したがって、フレーベルの幼稚園は本質的に既存の就学前施設を稜駕しており、「単なる保育の施設の水準をはるかに」超えたものであった。[脚注2]

[脚注2] 当時ヨーロッパの国々では、小児学校、遊戯学校、待機学校などと呼ばれる就学前の子どものための諸制度が、とりわけイギリス、フランス、オランダで17世紀から18世紀の世紀交代期にすでにつくられ始められていた。またその数はドイツ地域でも急増し、公的な注目の対象になっていた。

このようなフレーベル幼稚園の課題は、創設175年を経て、どのように深化してきたのであろうか。その第一の幼稚園の理念を主軸に提言したのがヘルムート・ハイラントの記念講演であり、上記の幼稚園の目的の第三の遊戯と遊戯様式の課題に対する実践の進化を示したのがカール・ノイマンの基調講演であった。そして第二の男女の若い保育者指導（保育士養成）に関しては、両者に共通する理念と実践の課題として提示されたように筆者には判断された。

I 幼稚園の理念の深化

ハイラントの記念講演は三節から構成されている。I. フレーベル「幼稚園」の創設：成立、構造、目標設定、II. 教育者／フレーベルの自己性

格描写、III. フレーベル研究（歴史）とフレーベル教育の遺産である。

第一節は、1841年5月6日付けのフレーベル論文「幼稚園の本質、とりわけドイツ幼稚園の解説」を引用しながら、特にドイツの幼稚園の「普遍性（das Allgemeine）」の意味を導いている。では一体、「ドイツ的幼稚園」の「普遍性」とは何か？ハイラントはフレーベルがいつも内容を説明する際に行う「ドイツ語の綴り」から説明する。'allen'（みんな）が 'gemeisamen'（共通）である「子どもの遊びの本能」、たとえ、それぞれの現象が異なっても、遊びの本能は共通なもの、普遍的なものであると説明される。まさにドイツ語の綴りのなかに「本質」が存在するというものである。その具体が1840年頃に描かれた「子どもの庭の風景」なのである。（末尾写真A）

同様の手法でII. の教育者について解説される。「教育者は簡潔に、精神的なマグネットだ。つまり成長する人間のなかで目に見えない萌芽としての精神のなかに引き寄せるマグネットなのだ」と。そのことは「人間が彼（ein Er=神）であり、ペルソナ(eine Person)であり、自立的(ein selbständiges)で、意識的(bewusste)な、かつ、その根源には「人類との」連鎖と自らの尊厳さを備えた存在なのである。」と。きわめて抽象的な人間に対する定義だ。だがそれに続く、人間の使命、教師の使命は—(略)—ドイツ人としてその職業に自己を捧げ、献身すべきものなのだ、とされている。

最後のIII. フレーベル研究（歴史）とフレーベル教育の遺産に関しては、ハイラントは「幼稚園」が「ドイツ的成果のモデル」であるか？の判定については懐疑的な結論を導いている。つまり、ありにもフレーベルは独自の「ドイツ主義」を強調しているからである。だが、「教師」の使命に関しては、人類の教師といった観点から『幼稚園』の理念の深化を図っている。1813年に勃発した反ナポレオン戦争の義勇軍に参加したフレーベルの「戦争体験」がドイツ人の使命を強固なものにしたと考えられる。

このハイラントによるフレーベル「幼稚園」の評価に対して真反対の判断を示しているのが、旧東ドイツ時代、継続教育のための州教育指導セン

ター代表所長を務め、フレーベルの教育思想、理論の研究の第一人者として、さらには実践の指導者としてその責務を担ってきたのがロゼマリー・ボルト女史である。女史はフレーベル研究者として今日もお研究者からも実践家からも高い評価を受け信頼されている。女史は、今回の専門部会でロックシュタイン・フレーベル館長共々、「幼稚園。子どもたちへの贈り物。フレーベルのキンダーガルテン—過去からの未来のモデル」のテーマで報告した。

ボルト女史は、1843年のフレーベルの「ドイツキンダーガルテンのニュースと釈明」を引用して、一般ドイツ幼稚園が子どもの養育のためのモデル施設 (Musteranstalt) であり、子どもの保育者のための練習施設であり、それにふさわしい遊戯や遊戯方法の一般化を探求する施設であり、そこから最終的には活動する両親、母親、教育者そして自らが形成しようとする幼稚園を生き生きとした人間諸関係のなかにあるのが、「ドイツキンダーガルテンなのだ」としている。

[図2 フレーベルの生誕100年(1882年)祭の贈り物として配布されたキンダーガルテンの教師(保母)と子どもの姿。今回チューリンゲン州立ハイデクスブルク博物館によってG.エアニング博士とロックシュタイン女史の「あとがき」を付して復刻された]

われわれは同じフレーベルの資料を引用しながらも、これら両者の＜ドイツキンダーガルテン＞をめぐる「理念」の深化の相違をどのように理解したらよいのであろうか？ただ両者の共通点は、幼稚園で働く教師(フレーベルの場合、ある時期は＜保母＞と命名されていたが今日的には＜保育士＞ということばがもっともふさわしい)の「理念」「目的」の深化を意図していることである。簡潔に言えば、幼稚園教師の＜使命＞の「深化」の問題なのである。

II. 幼稚園の実践の進化

6月27日開催された専門部会のスローガンは「幼稚園—全ての人のための人間形成の場 (“KINDERGARTEN—Ein Bildungsort für all”)」であるが、その際のノイマンの基調講演のタイトルは「対話の中で発達する生活の言語能力 — フ

レーベル教育学の現実性について —」で、その内容は三節から構成されている。

第一節 生活空間としての幼稚園—具体的なユートピアとしての幼稚園理念の作用史。第二節 遊戯のなかで、遊戯の養育を通して生活の言語能力は発達する—対話に方向付けられた就学前教育の現実的な手掛かりに関するフレーベルの刺激。第三節 神と世界との対話における世界認識と自己認識—フレーベルの人間学と人間形成の哲学である。

この基調講演のタイトルからは具体的な提言のように感じ取られるが、反対に各節の構成からはきわめて難解で抽象的な哲学的論議のような印象を受ける。しかしながらノイマンの真意は、子どもの具体的な生活の中での遊戯やその遊戯を育成する際の子どもと両親、保護者や子どもと保育士との対話やそれを促進する遊戯や遊戯を育てる仲介物としての「教育遊具」(教具)の革新にこそ注意を払うべきことを示唆しているのである。それは冒頭に掲げたフレーベルの「ドイツ幼稚園報告」の課題の第三、「ドイツ幼稚園は、幼児保護を共有財産にすべく、そのための遊具の宣伝、普及に努めること。子どもの段階的な発達と人間の本質に基づいた適切な遊戯と遊戯様式をもとめる」に符合する具体的な展開としての「教育遊具」(遊具)の革新なのである。その具体をノイマンは、当日の基調講演に一枚の『付録』を添付している。それは「生活経験の＜自由な作業＞としての遊び」という1841年ハンガリーの伯爵夫人テレゼ・ブルンスヴックに宛てのフレーベルの書簡と1839年7月21日付けの教会音楽指揮者カール (Carl) に宛てた二葉の書簡からの資料である。

今回の専門部会の主会場の入り口、受付のホールには鮮やかな色とりどりのフレーベル遊具が展示、即売されており明らかにフレーベル遊具の「革新」が見て取れた。従来のフレーベル遊具の原理、例えば、「恩物」などに見られる＜美的形式＞＜生活形式＞＜認識形式＞の等の原理を尊重しながらも子どもの興味や関心を引き出す工夫(現代化)がいたるところで工夫された『教育遊具』に変身しているのである。そのには一般の「玩具」とは一線を画した、見事なフレーベル教育遊具の考案

が施されている。[図3 色彩豊かな遊具]

「教育遊具」の考案・実践という面では、今回の幼稚園創設175周年記念祭に関連してフレーベル博物館内で展示され、実演された〈遊びの波〉プレゼンテーション『私たちと一緒に幼稚園創設175年を祝いましょう！一緒に遊ぶ＝そして一緒に展示しましょう』という見学者参加の『遊具』の製作、実演の催しである。スローガンは「遊びと新しい思考(SPIELEN NEU DENKEN)」である。ドイツの遊具会社Spielwelle Vertriebs GmbHがフレーベル遊具の革新を図る、実に注目すべき展示会、実演会場である。(本年12月23日迄展示され、実演が可能である) [図4「遊び-新しい思考」のパンフレットから。さらなる情報はwww.spielen-neu-denken.de]

その他、音楽(楽譜)と手による「影絵」との小冊子“Fingerspiele für gross und klein”(大小の手遊び)絵本とCD付きで考案されていたり、フレーベルの「ボールの歌」が現代化して小冊子で、これまたCD付きで販売されている。このようにフレーベル遊具が多岐にわたりその「革新」が図られ、具現化されているのである。ノイマンの実践家を前におこなった基調講演はこの流れを支える人間学的基盤の提示であったのである。

まとめ

今回のフリードリヒ・フレーベルの「一般ドイツ幼稚園」創設175周年の記念祭の様相を地方紙『フランケンの日(fränkischer Tag)』が特集を組んで大きく取り上げている。その標題は〈子どもへの革命的視座〉である。そして紙面中央には写真と共に大きくフレーベルの主張“キンダーガルテンは〈施設(Anstalt)〉と呼ばれるべきだ”と書かれている。(fränkischer Tag, Dienstag, 23. Juni 2015 参照)

先のヘルムート・ハイラントの記念講演による「幼稚園」の理念の深化といい、カール・ノイマンの「幼稚園」の実践の深化の人間学的前提といい、核心はそれらの思考や論理を一体誰が〈担い〉、日々活動し尽力するかということである。

明らかなことは、それは日々「幼稚園」で子どもに関わる〈保育士〉なのである。その保育士がどのような「幼稚園」観を抱き、日々、目の前の子どもと対峙し、関わりあうかなのだ。

今回、ハイラントの「記念講演」とノイマンの「基調講演」の二つを拝聴して、両者共にフレーベルの書簡を引用する手法で講演内容を構成していたが、〈モデルとしてのフレーベル幼稚園(一般ドイツ・キンダーガルテン)〉に関しては正反対の結論を下していた。ここには「オリジナル資料」だけに依拠する研究の限界があるのではないか。具体的に述べれば、フレーベルのオリジナル書簡といっても、それが、いつ、だれに、どのような意図・内容で書かれそれが発信されたのか、という問題である。従って、資料として使用されたフレーベル書簡といっても、表出されたその内容は当然異なるのである。そこにはオリジナル資料に依拠する研究手法の難題が存在する。それを克服する〈途〉や〈方法〉はあるのか?それが先ほど指摘した思想の〈担い手〉、すなわちトレーガー(Träger)、われわれの場合、「幼稚園・保育所」の〈保育士〉なのである。それ故に、ハイラント、ノイマン共に、〈保育士養成〉において将来の「幼稚園」のモデルを提言することになったのは当然の帰結なのである。

ドイツの場合、今回の「一般ドイツ幼稚園」創設175周年の記念祭を実質的に支えたドイツ・国際フレーベル協会(ベルリン)、ペスタロッシャー・フレーベル連合(ベルリン)の多くの実践家が今後さらに、幼稚園・保育所を包括した「子どもを守る」施設の「担い手」として活動することが証明された。

それにしても今回の「一般ドイツ幼稚園」創設175周年の記念祭に先駆けて、2013年から2022年までを「デカーデ(十年)」として、ドイツの子ども保育(保護)施設の全体を検証するという事業(今回の「キンダーガルテン — 全ての人のための人間形成の場」もその検証の一つの機会なのであるが)には、ただただ感服・驚嘆の以外の言葉もない。同時に、筆者が今年度から開始した科学研究費による研究テーマ、「未刊行資料の解説によるフレーベル保母養成の思想・制度・カリキュラムとその評価研究」と同一の課題であることも

驚きであると共に得心した。

もう一つ、今回のドイツキンダーガルテン創設178年祭は、チューリンゲン州教育・科学・文化省、チューリンゲン州保健・家庭省が共催して挙行されたことは冒頭で述べた。それと同時に、ドイツ連邦政府財務省が、驚くことに、記念切手の発行という方法で参加・協力したことである。財務省大臣は『フレーベルの幼稚園こそ、国際的な輸出商品だ』と特別郵便切手の発行の理由を説明している。全国公募のデザインが地元チューリンゲンの女性の描く、元気よく<遊び>に興ずる子どもをデザイン化した微笑ましい活動的な図柄である。[図5 特別郵便切手 ドイツにおける最初のキンダーガルテン175年記念切手 ドイツ連邦財務省発行]

さらにこの記念切手発行には当然ながらドイツ郵便局が関与しているが、その記念切手の表紙にはフレーベル遊具の「進化」を裏付ける写真が用いられている。[図6 ドイツ郵便局発行のキンダーガルテン175年記念切手表紙]

それはどこまでも子どもが喜んで手にしたい、子ども中心の『遊具』なのである。

このようにドイツキンダーガルテン創設175周年はまさにドイツ全土での祝賀となっているのである。

わが国の『認定子ども園』は一体どうなるのか？政府の教育再生実行会議の『幼稚園』義務化の提言やその動向に対して、私たち幼稚園関係者はどのような発言と行動が必要なのか？そんな暗くて重い課題を考えながら帰国の途についた。

(2015年6月29日 記す)

使用・引用テキスト

Helmut Heiland, 'Friedrich Wilhelm August Fröbel. 175 Jahre Kindergarten.- Ein deutsches Erforsmodell?', Vortragsmanuskript mit Anhang, am 26. 6. 2015.

Karl Neumann, 'Lebenskompetenz entwickeln im Dialog. Zur Aktualität der Pädagogik Friedrich Fröbels', Vortragsmanuskript mit Anhang, am 27. 6. 2015.

Helmut Heiland, "Die Schulpädagogik Friedrich Fröbels", Hildesheim, 1993.

ditto, "Die Spielpädagogik Friedrich. Fröbels", Hildesheim, 1998.

Margitta Rockstein (Hsg.), Fröbels Kindergarten - Ein Zukunftsmodell aus der Vergangenheit 2015, Ss. 7-8.

Karl Neumann, 'Kindheitsbilder im Perspektivengeflecht von Mythen, Expertenwissen und Lebenswelt', in; "Kindheitsbilder - Familienrealitäten", Herder, 2013. Ss 20-22.

小笠原道雄著『フレーベル』、清水書院、2000年（新装版2014年）、3-4頁。

小笠原道雄著『フレーベルとその時代』、玉川大学出版部、1994、317-344頁。

参考文献（一部引用）

Erika Hoffmann (Hrsg.), Friedrich Fröbels Briefwechsel mit Kindergarten, Leipzig, 1940.

Erika Hoffmann (Hrsg.), Friedrich Fröbel an Gräfin Therese Brunszwick, Berlin, 1944.

R. ボルト／W. アイヒラー著小笠原道雄訳『フレーベル 生涯と活動』、玉川大学出版部、2006.

K. ノイマン著小笠原道雄・坂越正樹監訳『大学教育の改革と教育学』、東信堂、2006.

M. ロックシュタイン著小笠原監訳木内・松村訳『遊びが子どもを育てる—フレーベルの<幼稚園>と<教育遊具>』、福村出版、2014.

H. ハイラント著小笠原／藤川訳『フレーベル入門』、玉川大学出版部、1991.

Ed. シュプランガー著小笠原／鳥光訳『フレーベルの思想界より』、玉川大学出版部、1983.

(本研究は、日本学術振興会科学研究費（科研費）（学術研究助成基金助成）（基盤研究（C））、（平成27年度～29年度）による「未刊稿資料の解読によるフレーベル保母養成の思想・制度・カリキュラムとその評価研究」の研究成果の第一報である。)

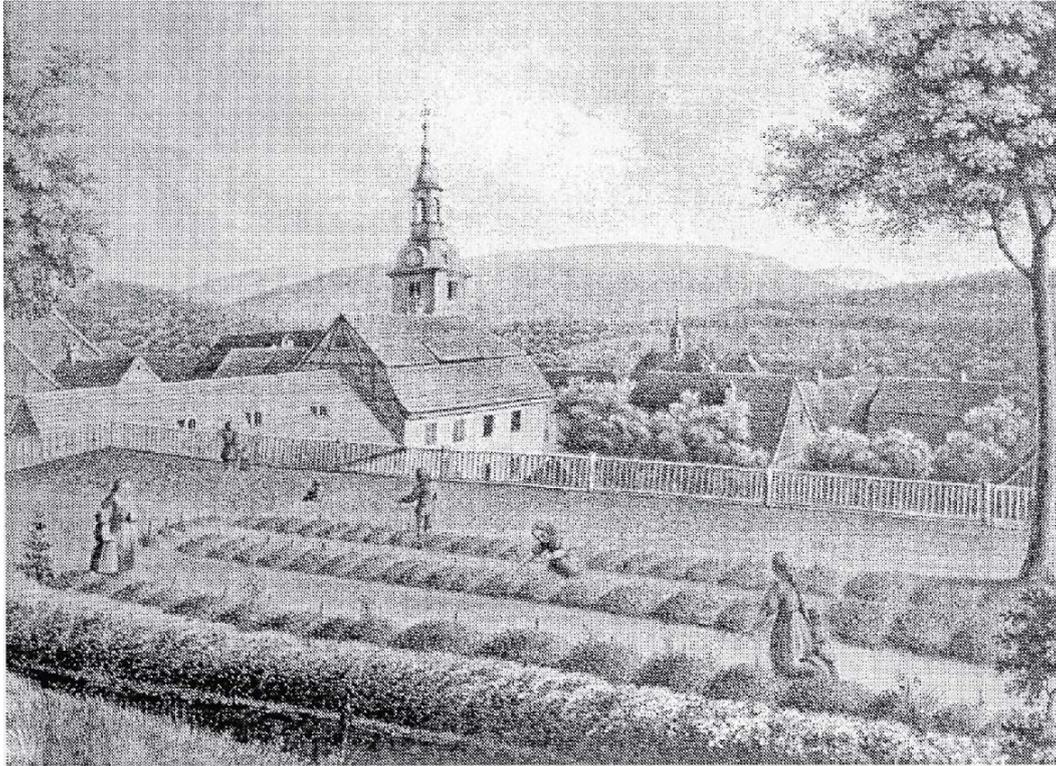


図1 1840年頃の「子どもの庭」の風景（リトグラフ）



図2 幼稚園の保母と子ども達。フレーベルの生誕百年記念（1882）に配布された冊子から



図3 色彩豊かなフレーベル遊具



図4 遊びの波：新しい思考のプレゼンテーションの広告



図5 ドイツ連邦財務省発行のドイツにおける最初の幼稚園創設175周年記念切手

175 Jahre Kindergarten



175 Jahre
Kindergarten



Deutsche Post 

図6 ドイツポスト発行のキンダーガルテン175周年記念切手の表表紙を飾る進化した「遊具」